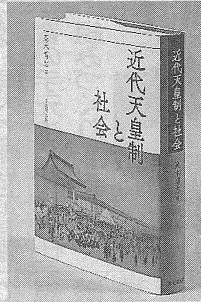


# 社会から読み解く「天皇制」

京大人文研が論文集発刊

京都大学人文科学研究所の共同研究「近代天皇制と社会」の成果が論文集にまとまった。神武天皇や南朝が顕彰されていくプロセスの分析、大正・昭和初期の伊勢神宮参拝の動向など、天皇制とそれを支える社会の関係に焦点を当てた論考を集める。神話を動員して天皇制を人々の間に浸透させていった戦前の動きにも詳しく、代表者の高木博志教授は「歴史学において、史実と神話を峻別することの重要性を改めて考える機会になる」と話す。



おりしも皇室は今春、「退位」「代替わり」と大きな節目を迎える。高木教授は「今日の象徴天皇制は、明治以降でもっとも広く国民に認知され、支持される時代の一つと言える。このような状況が生まれた背景を多角的に考えたい」と、2012年の研究班発足の狙いを語る。5年にわたる研究でのべ約80人が報告、論集には厳選16本を収めた。

幡鎌一弘天理大教授の「神武陵と橿原神宮の周辺」は、古事記や日本書紀に記された「神武創業」を復古の原理とする明治政府が1890(明治23)年に、神話上の「神武即位の地」に創建した橿原神宮(奈良県橿原市)に着目。同神宮とは別に、神武天皇への信仰をすくい取った神武講社の多様な活動を明らかにしつつ、国家神道の典型である橿原神宮も実態は「国民」

の崇敬を得て、国民によって支えられなければ、境内の整備や社殿の修復もままならなかった」と指摘し、神武顕彰と社会との関係を掘り下げた。

「社会との関係をテーマにしているため、中央の政治史からは見えない地域に即した問題を数多く取り上げた」と話す研究班代表の高木教授



説一の「軍神」イメージの形成過程を探ったり、関西各地における楠木正成・正行父子の顕彰運動を実証的に調べるなど、近代天皇制がどのように庶民に浸透していったかに迫る論文がそろう。高木教授は「京都盆地とその周辺の人々にとつての『天皇』だったのが、帝国憲法の発布、日清・日露戦争を経て日本全体に広がっていく。明治維新で一変した訳ではなく、広く認知されるのは20世紀に入ってからであることが分かる」と説明する。

京都大の田中智子准教授の「森有礼『不敬』・暗殺事件顛末―虚実の報道を通して」は、そうした近代化の担い手としての「天皇」

## 史実と神話の峻別を

代表の高木博志教授

のイメージが定着する前夜、19世紀末に起きた事件の経緯をたどる。文部大臣の森は伊勢神宮で「玉簾」を不法にステッキの先でさらげ「たなど」報道され、国粹主義者によって殺害されるが、真相は今も不明。田中准教授は新聞各紙の報道を渉猟し、京都新聞の前身「日出新聞」が事件のパロディー小説を掲載して一時発行停止になったことなども含め、「不敬」や「文明」「野蠻」の報じられ方を探っていった。

最後に収められた論文は、皇族で歴史学者の三笠宮崇仁親王(1915〜2016年)の「史学会発言」を取り上げた。古事記、日本書紀は神話であり、皇室の信仰にすぎず事実はないとして紀元節復活反対の運動を呼びかけ、応じない理事に対して脱退を宣言した「事件」を追う。

高木教授は「史実と神話の峻別を重視した戦後の歴史意識に基づく発言」と評価し、そうした意識が後退した現状を憂う。「倭の五王の一つの王墓でしかない大山古墳を『仁徳天皇陵古墳』として世界遺産登録を目指したり、神武東征のルートを日本遺産に登録しようとしたりする動きが広まっている。活用や観光振興の名の下、歴史的な真正性よりも神話や伝説、物語を優先するのは極めて危険だ」と、くぎを刺す。

論集「近代天皇制と社会」は思文閣出版、7800円。(阿部秀俊)